

くしくも前後して故郷に引き揚げてこられた。

夫の針に妻は糸のごとく、身の存在は遠く離ればなれになっていても、目に見えざる糸は切れない夫婦の真実の愛情があつた。

そして周さんの洋々たる大海のごとく、包容力に富んだ教養を生かされた人生觀に徹してこられた功德であらう。

(拙引揚者団体全国連合会)

副理事長 結城 吉之助)

一 少年の記憶

山形県 會 田 銳一郎

敗戦後の国民の生活はつらく惨めなものではあつたが、私の住んでいた旧満州国四平市は比較的恵まれた方で、北滿と異なり、ソ連軍の戦車や銃火器にじゅうりんされることも無かつたし、敗戦の屈辱で直に受ける婦女暴行も、私自身は目撃したことは無かつた。ま

た、ソ連や八路軍の兵隊に時計や布団など強奪はされたが、逃避行で幾多の生命を落とした開拓団の方々の悲劇もなく、家族全員で無事引き揚げる事ができた。

ソ連軍の進駐

終戦後、しばらくはまだ日本の軍隊が武装したまま四平市公署辺りに駐屯しており、街は割合静かで満人の野菜売りなども普通に商売しているような状態で、戦争に負けたという実感が乏しかった。ただ日本人のこれから先の生活がどうなるのか、どのような扱いを受けるのか分からなかつたし、いずれにしても相当長時間の食糧や、冬期に備えての燃料は真つ先に確保しておかなければならなかつた。

そのとき父は満鉄社員として北滿の扎蘭屯じらん屯にいるはずだったが全く音信不通、生死不明だし、姉二人、私、妹、弟二人の六人の子供を抱え、終戦後やむを得ず同居させてもらった友達の日夫人(御主人はやはり北滿方面の満鉄社員で未帰還だった)の杜宅で留守を預かつていた母の心労は並大抵ではなかつたらう。ともかく日夫人と組んで着物や貴金属など粟あわや高粱こうりやんに換える

ため、毎日のように出歩いてきた。燃料集めにいたつては、四平駅の構内に野積みになっていた質の悪い石炭を家族全員で麻袋に詰め込み、黙ってもらつてくるという離れ業もやつた。全くほそほそではあつたが、それから一年食いつなぎ、酷寒の満州を乗り切つたのは、このとき、必死で集めた食料や燃料のお陰であつた。

赤い腕章を巻き、緑色の軍服にピンを張つた軍帽をかぶつた少数のソ連軍兵士を市公署前で見たのは、八月も末に近かつたと思う。

わずか五、六人だつたが身なりからして将校クラスと思われる連中が市公署の中に入つていくところだつた。多分戦勝国の指令を携えて来たのだろうが、多数の日本兵の好奇の目にさらされ、固い表情で、むしろ若干不安そうに階段を上がつていつた姿を覚えていた。

それから数日後、ソ連軍の一部隊が入つて来た。日本軍に代わつて市公署の警備についた兵隊を見たとき、私をはじめ大抵の日本人は彼らの持つてゐるマンドリンのような小銃に驚いたはずだ。私は一人一人が機関

銃を持つてゐるのかと思つた。そのソ連兵士の重装備に比べて、三八式歩兵銃の貧弱さ、無敵を誇つた関東軍の実態をまざまざと見せつけられて、ひどい衝撃を受けたのは私一人ではあるまい。

更に彼らの凶体ずたの大きいこと、赤ら顔で声が野太くしかも手や腕に入れ墨をしている兵隊の多いことなど見るに至つて、初めて日本が敗れたという実感を持つた。

彼らから一体どのような仕打ちを受けるのか。日本人社会に大きな不安と恐怖心を巻き起こした。特に年頃の娘を持つてゐる家庭に、もちろん、私の家もそうだったがそれは大きかつた。

そしてその恐怖をわが家ではその後じつくりと味わうことになる。

略奪と姉たちの危機

九月のある朝、裏木戸を押して一人のソ連兵が入つて来た。裏口のドアのガラス越しに中をのぞき込みながら銃の尻でドンドンとドアを叩く。私の姉二人は長姉十九歳、次姉十六歳であるが真っ青になつてすぐ奥

の便所に逃げ込み、息を殺している。ちょうど隣のSさんの兄ちゃん（病身で兵隊にも行かず家でブラブラしながら、終戦を迎えた人だった）が遊びに来ていて、偶然そこに居合わせたのだが、「下手に抵抗しても無駄だし、鍵をあげて入れてやった方がいい」と言うので恐る恐る鍵をはずした。

のっそりと入って来た兵隊の大きいこと。頭をかかめて靴のまま畳の部屋に立ったときは、まともに顔も見られない。母や日夫人は手拭を頭にかぶり、小さな妹や弟をかかえ込んで部屋の隅に小さくなっている。

二間しかない部屋中を見回していた兵隊は私やS兄ちゃんにしきりに左手首を指さし、「エトー、エトー」と言う。私はハッと気付いた。「腕時計を欲しがっているのだ」と…。

そのころ、進駐して来たソ連軍は何を見ても欲しがること、特に腕時計には目がないらしく、それを差し出せばおとなしくなるし、見せたら最後、強引に取られること。知識の低さを物語るのかネジを引つ張って針を合わせることを知らずに、ガラスの蓋をこじ開け

てしまうこと。一人で略奪した腕時計を何個となく腕にはめていたこと。果ては眉つばものと思うが電灯の灯で煙草をつけようとしたことなど、半分はソ連兵の強い物質欲望に対する警戒から、もう半分はその程度の低さを物笑いにしようとするところから、しきりに言いふらされていたのである。

もちろん留守家族の我が家に貴重な腕時計なぞあるはずもない。手を横に振って「ないない」と言いながら左手首を見せるのでした。

ソ連兵はしばらく見まわしていたが、今度は押し入れの襦を開けにかかった。ところが彼は日本式家屋が初めてなのか、襦を横に滑らせて開けることを知らないのである。しきりにドアのように手前に引つ張るものだから、ガタンと襦がはずれてしまった。中には布団や寝まきしかない。中をのぞいていたが何も目ぼしいものがないとわかると、やおら奥の便所の方に向かっていく。中には姉たちが隠れている。あのときのドキン!!とした感じをどう表現したらよいか。

S兄ちゃんもそれに気付いてすぐタンスの上に置いて

てあつた目覚まし時計を取るとソ連兵の前に突き出し「これでどうぞだ」と日本語で言いながら、便所の方に

行かせまいとする。ソ連兵はそれを手に取つて見ていたが、黙つてポケットに入れ、更に便所のドアを開けようとした。もし姉二人が見付かつたらどんな目にあうか。その場でなくとも連れ去られて、ソ連兵の餌食になることは必至。後は殺されてしまうかもしれない。

「もうだめだ」という絶望感や恐怖感から私は思わす「そこは便所だ、何も無いよ」と日本語で叫んでしまつた。その声の中に届いたとしてもどうにもならないのだが、叫ばずにはいられなかつた。ソ連兵はちよつとふりむいたが何を言っているのかわかるはずもなく、便所のドアを開けた。身震いするようない瞬。

しかし大丈夫だったのである。

ソ連兵はちよつと中をのぞいたきりすぐドアを開めた。つまり姉たちはそこにいなかったのだ。私たちは茫然とした。やがてむしように嬉しくなつた。

後で聞くと姉たちは危機に対する女の勘からソ連兵が家に入ってきたとき便所に隠れたものの、ここも危

ないと思ひ、上窓を開けて外にはい出し、向かいのN先生の家に逃げ込んでいたというのである。

姉たちが無事ならば、こんな家から何を持っていかれようが大したことはない。私は途端にソ連兵に慣れ慣れしくなつた。畳の上を土足で歩かれようが、時計をポケットに入れられようが、そんなことはどうでもよい。むしろ私はソ連兵の持っているマンドリン銃を見たくて、彼にそれを見せてくれと身振りで要求した。小うるさく思つたのか、彼はその銃を私の方にむけ、「バーン」と言いながら死ぬ真似をする。しきりに感心したような顔をしてやる。機嫌をとつておくにこしたことはない。

S兄ちゃんも姉たちが無事だつたとわかつてからは元氣が出て、ソ連兵に向かつてそのポケットを指さし目覚まし時計を戻せと言うように指をタンスの上にもつてくる。ソ連兵は知らんぷり。

あとは何もないと見極めたのか、時計一個を奪つて裏口から出ていったが、その間約三十分。しばらくは皆声も出ない。

こういうことは隣近所、娘さんのいる家はみな経験したことである。向かいのN先生宅にも年頃の四人の娘さんがいたが、何度私の家に裸足で逃げて来たことか、来れば私たちの布団の中まで入って隠れたこともあった。お互いによくしたもので、隣近所の情報連絡をすばやく男同士が行い、次から次へと女たちを逃がし続け、私どもの社宅群からは私の知る限りでは、だれ一人ソ連兵の犠牲者は出さなかつた。

豆腐の行商

八月十五日、急に南鮮方面への疎開が中止になって、集合した四平の駅から市の北外れにある、我が家に戻ることは危険なことが予想されたため、友人のH夫人からの親切な申し出もあり、比較的 안전한満鉄南社宅街の中にあるHさん宅に、同居をさせていただくことになった。母と私は「のうのうとHさん宅の居候をきめ込むわけにもいかない。兄弟、姉妹も多いことだし、当分売り食いを続けるにしても、何とか生計の道を探さなければ」ということで、いろいろ考えた結果、家から一キロほど離れた満人の豆腐製造所から豆腐を仕

入れ、それを社宅街に売り歩くことにした。住んでいゝる社宅街の西側にも相当数の家があるから、これを一軒ごと回れば何とか商売になるのではないかとこの計算であつた。母も私もまるで行商などやつたことはなかつたので、最初から戸惑うことばかりであつたが、豆腐は石油カンに水を張り二、三十丁入りの二缶を天秤で私が担ぎ、母が一軒ごと声をかけて歩く。あまり近くではまだ気恥ずかしいので少し遠いところから始めることにした。

学校でモッコ担ぎはしたものの天秤は初めてで最初は腰が定まらず、ヒョロヒョロと母の後を追うのだが、石油缶からは水があふれてビショぬれになるし、縦横に揺れて担ぎにくく重くてしようがない。それでも豆腐が順調に売れるのならまだしも、どこの家でも遣り繰りは大変な時期であつたからなかなか売れない。夜明け前の暗いうちに仕入れて朝早くから夕方まで、五十丁の豆腐が半分も売れ残る日も少なくなかつた。全部売らなければ商売にならないので母も私も必死で頑張つた。

中学校からは終戦と同時に、しばらく授業を中止し、今後別命あるまで各家庭にあって待機し、一家の守りに力を尽くすようにとの通知が出されていたので、その方の心配はなかった。そのうち担ぐにもだんだん調子がとれ、また売る方も買手が覚えていて待つていてくれることもあって、次第に好調になってきた。少し

欲も出てきてもう少し量をふやしたいこと。案外買手の方は「オカラ」や「油揚げ」を求めていることもわかったし、治安の方もだいぶ落ち着いてきたこともあり、息をひそめていた姉たちにも家の中で手伝ってもらうこととし、少し商売を拡大することにした。まず豆腐を入れる容器を底の平らな板の箱に切りかえた。それが安定感を増し、「豆腐の数も二十丁ほど余計に入ることがわかっていたからである。板の箱だとその上に「オカラ」も乗せることができた。残った豆腐を利用して姉たちが家で作った「油揚げ」は母が手籠に入れて持つこととした。

今後は母も慣れてきて声も自然に大きくなり得意先もでき、毎日の仕入れの量も安定してきた。少しずつ

純益も上がるようになる。面白味も増してくる。他人の家に厄介になつてゐる我が家の生きて行く道は、今のところこれしかない。と覚悟をきめ、ますます豆腐売りに精を出した。

行商の途中、中学の同級生にばつたり会つたことがある。一瞬お互いに目を伏せて行き過ぎたときの複雑な気持ち。彼がそのときどういう生活をしてたか知らないが、私は豆腐の行商、その他にも同級生で生きんがために菓子を売つたり、野菜を売つたり、満人に雇われて野良仕事をやつたりした者は少なくないはずである。何も恥ずかしいことはないのだが、会えば具合の悪いものは仕方がない。そんな気持ちであつた。

日の暮れも早くなつたある秋の日、その日の行商を終えて、母と家に戻ると日夫人が「奥さん、今日特別に住宅の共同浴場でお風呂が使えるそうよ」とのこと。その共同浴場は今までソ連の一分隊が使用して、日本人は使用禁止になつていたのであるが、すでに数日も風呂に入れないのはまことにつらく、日本人会の代表から陳情により、許可が下りたのだそうだ。母

は喜んで出かけた。

どんなに気持ちよく帰って来るかと思っていたが、戻って来た母は何やら茫然自失の有様。「大変なことをしてしまった」と言う。聞いて私たちも目の前が真っ暗になった。風呂に入るのが嬉しくてモンペの中の財布のことをすっかり忘れ、そのまま脱衣、入浴してから「あっ!!」と気付き慌てて戻って脱衣カゴの中を探したが、だれが盗ったか財布はあとかたもなし。間違いのように探し続けたものの、あのすさんだ時代、絶対に出てくるはずがない。母が戦前より貯め込んだヘソクリをはじめ、豆腐の売り上げ代金一切、約三千円が紛失してしまったのである。「私がうっかりしていたばかりに盗られてしまった」とつぶやくばかり。どうしようもなかった。明日仕入れる豆腐の元手もない。ややあって日夫人がこう言った。「奥さん、盗られたものを悔やんでも仕方がない。これからのことを考えなさい。私も協力するから」と。今もって私のはあのと時の日夫人に頭が下がるのだが、自分の持っている虎の子から「千円」の元手を貸してくれたので

あった。

もはや背水の陣であった。豆腐も八十丁ぐらいは担いだ。オカラの盛りもよくし、油揚げも厚くして得意先を増やした。

借用していた千円を、いつどうして返したのか、はつきり思い出せないところを見ると、母は月賦で返していたのかもしれない。しかし母の落とし物は逆に商売にとっては刺激になってプラスに作用したのは間違いない。

父の生還

チラチラと雪の舞う酷寒の冬になった。豆腐を鍋に入れて手渡す母の手は真っ赤だった。

夜明けも遅くなり真っ暗な道を豆腐の仕入れに行く途中、市公署の前で歩哨に立っている八路軍から、鋭い「誰何」^{すいか}を受けるのが恐ろしく、わざわざ遠回りをしたり、寒さのためか両膝に関節炎を患い、曲げると若干の痛みがくるなど悩みは大きかった。明日も嫌な誰何を避けて遠まわりせずばなるまい、と早めに寝をとる。

夜半十時を過ぎただろうか。裏口をコトコトと叩く音。今ごろだれか。一瞬みな顔を見合わせたとき、「おい俺だ、会田だ」と言う声。「あつ！お父さんだ」と母の飛び上がりそうな叫び。頭からすっぽり防寒帽や、厚い外套で身を包んだ男、父がすばやく中に入る。

とうとう帰って来た。終戦後、満州での生活はつらく苦しいことの連続ではあったが、父が生還し家族全員がそろったときほど嬉しかったことはない。そして全く偶然にその数日後、同居している日夫人のご主人も北満から帰り着いたのである。久しぶりで皆に笑顔が戻った。

しかし、父がなぜ私たちが日さん宅に同居していることを知ったのか。二人ともどうやって北満からの危険な道中を切り抜けて来たのか。上の空で聞いたせいのかよく思い出せない。

いずれにしても、満鉄の組織力、情報力が終戦後も深く静かに働き続けていたことは事実である。

父も日さんも相当疲れ切って二、三日は、寝込んだような気がする。ただ防寒帽の中や外套の裏地、禪の

ヒモにまでコヨリのように縫い込んだ紙幣が出てきたことや、よくダワイされずに持ち帰ったと思うのだが、スイス製の腕時計を取り出したときは、みなびつくりしたり喜んだりしたのを覚えている。

その日以降、父に褒められたのが嬉しくて、天秤棒を担ぐ肩に一層力が入った。父は終戦後、仕事の整理とか寒い時期の逃避行などの無理がたたったせいか、相当ひどい喘息が出て、すぐには働くこともできない状態であったが、次々と適切な指示やアイデアを出し、それが中するものだから、ただ寝ていてもらっても充分存在価値があった。

豆腐は寒くなつたのだから、少し楽をするため行商を少なくし家で売ること。そのため買いに来た人には油揚げやオカラなどのオマケとしてやること。この話が広がれば必ず買手が増えるという、父の発案で実行したところ見事に当たった。奥さんは少しぐらい歩いてもオマケのある方が有り難かつたのである。また姉たちの仕事として、満人市場から白米を仕入れてきて「巻き寿し」や「いなり寿し」の作り方を教え、そ

れを紙に包んで豆腐を買いに来た人を対象に売り込んだ。これも当たった。父は昔、道楽で寿し作りを会得し、それが役に立ったというわけである。姉たちはただ店売りだけではつまらないから、市場に行つて売つてみたいと言ひ出し、満人の店に父が話をつけ、その一角を借りてやってみることにした。白い布に親父が筆で「寿し」と書いて、それを箱台に張りつけ、「のり巻き」と「いなり」を並べて出したところ、珍しがつた人に順調に売れ、様子を見ながらではあつたがそれが姉たちのその後の仕事になつた。

正月も近くなり、ますます寒くなつたが、豆腐も寿しもまず順調で、わが家は父が帰つたことも含めて、何となく自信が付き、昭和二十一年の正月は、のり巻きといなり寿しを食べ、大人はバイカルを飲んで過ごすことができた。

娘の供出命令

二月中旬の寒い日、そのころ、曲がりなりにも再開していた学校に久しぶりに登校し、先生や友達に会い晴ればれとした気分ですごる帰宅した。母が不在だつ

たので尋ねるとお向かいのN先生宅に出かけているとのこと。返事をする姉たちの様子が何やら不安気なので、聞いても上の空。やがて帰つて来た母の顔は真つ青であつた。「お父さん、大変なことになつた。二人とも当たつてしまつた」と絞り出すような母の声。一瞬、父も姉たちも「えっ!!」と言つたきり絶句の状態が続く。何か嫌な予感がして、ただその状況を見つめていると、ようやく父が「何番に当たつたのか」と聞くとも母は堰を切つたように、「私が代わりに行く。くじを引いたのは私なんだから。まさか二番と四番に当たるなんて。どうしてこんなことが……」などと泣き声で叫ぶ。父は黙念と腕ぐみをしたきり考え込むし姉たちも顔色はない。

日本人の独身女性を従軍看護婦として差し出すように八路軍の命令があり、私どもの住む満鉄社宅界隈の娘さん四十数人に、二人の割り当てがあつて、もちろん希望者などいるはずもないし、結局くじで決めることとなり、対象となつた姉二人にくじを引かせるに忍びず、母が代わりに出かけた結果が、長姉が絶対逃れ

られない二番に、次姉が次に指令がきたときの順序となる四番に不運にも当たってしまったのである。

事情が飲み込めるとき、姉たちの運命を思つて熱いものがこみ上げ、外を眺めるふりをしながら窓のそばで涙を流した。看護婦などと言つても果たしてどんな扱ひが待っているのか想像に難くない。結局慰安婦まがいのこともさせられるのではないか。そして軍の行くところどこまでも連れ回されて、二度と家に戻れないのではないか。

口では中国人も日本人もみな平等であり、協力し合つて共産国家を建設しようなどと言つているが、最近いよいよ国府軍との戦争が間近く、その準備に狂奔しているせい、この間の夜、八路军の兵隊が家に来てお説教をした後、結局かけ布団一枚とうっかり父が手首にかけていた腕時計を目敏く見つけられ、これもまき上げて行つてしまったこととか、最近郊外の塹壕掘りの劳工狩り出しが、いよいよ厳しくなってきたこととか、この看護婦供出も正にその一環であることは明白だった。

父の苦悩は激しかった。後日、母はよく、「お父さんの頭はあれで白くなった」と言つたものだ。しかし、父の腹は最初から「娘は出さない。出さないためにどうするのか」と固まっていた。八路军の命令に背くことはできない。日本人社会の迷惑になるだけである。

しからば母を代わりに出すかと言つても、独身女性という指定がある以上、駄目だと言われればそれまでであるし、また娘の代わりにその母をなどという考えは、父は一瞬にして捨て去つたに違いない。結論は明白である。要は「賄賂」で解決できないか。父はあらゆる伝を通じて、その可能性を探つた。満鉄時代の友人や隣組長への相談、軍に顔のきく満人への接近など。しかし結局それはうまくいかなかった。

期限は近づいてくる。次姉が「私は満鉄病院の看護婦養成所で勉強したから、長姉よりは要領よくやれる。長姉はおっとりしていていざというときに逃げることもできないだろうが、私ならうまくやつてみせる。だから私が最初に行く」などと言ひ出す始末。いよいよ決断しなければならなくなったとき、隣組長から、次

のような話が持ち込まれた。以前に花柳界で働いていた女性が、たった一人の弟を無事内地に帰すため、身売ってでも金が欲しい。仕度を全部そろえて一万円を身代わりと引き受けるかもしれないと言うのである。父はすべてをそれにかけて。必要な金は遮二無二集めた。持っている金はもちろん、売れるものはすべて売った。Hさんからもまた金を借りた。そして仲に入った隣組長と通じ、本人に会い布団や着物などの仕度品とともに、要望の金を渡して引き受けてもらったのである。

一番に当たった女性は行ったそうである。また本人が承諾したといっても身代わりになった女性の一生を金で買った行為は、引き揚げてからも父母の記憶の奥底に深く沈殿していた「しこり」であったと思う。しかし、数年後その方が無事日本に帰って来て、弟さんと落ち着いた生活に入ったとの便りを得て、ようやく気持ちが軽くなったと語った母の言葉が忘れられない。

中国の内戦そして引揚げ

昭和二十一年四月から一カ月間、四平市争奪の攻防

は、国府軍と中共八路軍の内戦の中で最も激しいものだったと思う。

南方から攻め上がる国府軍は最初豊富な物量で圧倒的優勢を保ち快進撃を続けてきたが、四平市に至って中共軍の頑強な反撃に遭い、その進撃の速度は極端に鈍くなり互いに消耗し合うだけの膠着状態（まじり）に陥ってしまった。

中共軍が四平市を天王山と見て以前から、郊外に強固なバリケードや塹壕を造り、そのための日本人を含む勞工の狩り出しは峻烈で、犠牲者も少なからず出たという話は聞いていたが、やはりそれが国府軍の進撃を鈍らせたのだった。

四月中旬から始まった戦いは、私ども日本人にはただじつと戦火を避けて身を潜めるしか方法がなかった。国府軍の砲撃によりいつ住宅街に着弾するかもしれない。正に戦時中の防空壕よろしく穴を掘り身を隠さなければならなかったが、寒い満州のこと、外に壕を掘るのは無理だったし、各家庭とも部屋の畳を上げ、板床を鋸で切って床下に穴蔵を掘り家族全員が入れるように

した。昼夜を問わずドーンという砲声を聞くと、まず
畳を上げ板床をはずし、一人ずつ穴蔵に入り一番最後
に男どもが畳の蓋をかぶって小さくなっている生活が
連日続いた。着のみ着のままでは顔は真っ黒、冬だった
からそんなに匂いはしなかったが、単に食うこと、寝
ることだけ。商売も何もあつたものではなかった。煤
だらけの顔を見合せて、苦笑いはしても生き延びる
ことができればそれでよし。みなじつと嵐の過ぎるの
を待ちわびていた。

一カ月後、ようやく弾も底をついたのか、中共軍が、
新京、ハルビンまで撤退し、国府軍が緑色の軍服にハ
イカラな軍帽をかぶり、中共軍とはまた異なつたアメ
リカ製の軍装で四平兵に入城したとき、私どもは、や
つと穴蔵からはい出し、日のまぶしさに目を細めよう
やく愁眉を開くことができた。

垣根にしているニレの木も芽ぶき、その若芽を摘ん
で、あのネバネバするおひたしにして食つたとき、ま
だ生きている喜びを味わつた。

数日後、国府軍の宣撫隊が満鉄杜宅にやって来た。

栄養のよい太つた若い兵士が多かつた。

南方なまりの中国語は難解だつたが、しきりに「ブ
ーパー」を連発する。通訳が「こわくないということ
です」と言う。兵隊たちは陽気でゲラゲラ笑うし、中
共八路軍の何となく冷たい感じとは全く違う。アメリ
カふうの教育を受けた軍隊がこれかと、ぼーっと見て
いたのを思い出す。

五月下旬、国府軍の指令として日本人の内地帰還の
話が出た。実際に南満州地域の日本人の引揚げが始ま
つているとの情報も入つてきた。商売も上の空だつた。
日本人が寄るとその話でもちきりだつた。毎日のよう
に隣組ごとの会議が持たれた。「日本に帰れる」とい
う喜びがだれの顔にもあふれるばかりで笑い声さえ聞
かれた。

わが家では要望の一番強かつたドラム缶の風呂が、
玄関に据えつけられた。体を暖めると本当に血管がズ
ンズン広がるような気がした。恥ずかしいほど垢が出
た。そして私の両膝の関節炎がその風呂のお陰でみる
みるうちに治癒したのである。嬉しかった。

そして、夏、暑くなり始めた七月の初旬、四平市在住日本人の第一陣の引揚げが開始されたのである。

【執筆者の横顔】

會田銳一郎氏は、昭和七年生まれの現在六十二歳である。

名門、山形中学、現在の東高等学校から中央大学法学部を卒業し山形県庁入りした。

會田氏の父親は、当時満州鉄道の職員として遠方に勤務しているさ中に日本敗戦に遭い、移住の場所も不詳どころか生死不明なので、子女六人を抱いて母親は錯乱しそうだったに違いない。その母親を、中学一年生の八月、少年でありながら、長男として必死になつて手助けをし、姉たちを守りながら死線を突破したその堅忍不拔の精神が鍛え貫かれ、そのおかげで一家の無事が保たれたのであろう。

当時の旧満州は人間らしい生活ができるような状態ではなく、正に地獄そのものであったが、数カ月後の冬も迫るころ、奇しくも父親が四平市に住んでいる家庭のもとに帰られたが、それまでに一家の生存を支え

た死に直面しての創意工夫しての努力と信念と家族並びに隣人愛を貫いて生きた會田氏の人生観は、この戦乱の中で生まれたのであろう。

現在は、県社会福祉事業団、理事長の要職にある。

この事業団は、県内に救護、身障者の更正援護、授産、特老ホームなどの、十四の施設を擁している県内最大の福祉施設事業を運営しているが、施設利用の大勢の方々から、救世主のようにあがめられ、したわれている會田氏である。

(社)引揚者団体全国連合会

副理事長 結城 吉之助

渡満―終戦―逃亡―帰国の記

福島県 鈴木康夫

昭和十六年三月、私は福島県安積郡赤津村立赤津尋常高等小学校を卒業することになっていた。

ちようどそのころ国策として「若人よ大地へ」の言